

と、ボロ布を巻いただけの靴だった。

「コレには、四日分の食糧を持たせてある。フェランまでは四日の距離だ」

大人の男の足なら、の話である。けれどシエルツは何も言わなかった。

「町までは送りたいところだが、嵐のせいで畑が心配なんだね。あとのことは頼むよ。コレには迷惑をかけんよう、言つてある。……おい、元気でやれよ」

父親からの言葉に、少女は顔を上げた。男は顔を引きつらせ、わずかに手を泳がせる。しかしその手は我が子に触れることなく下ろされ、少女は再び下を向いた。

「そういえば、あんたがたの名前も聞いてな……」

「嵐を避けられたことには礼を。おいで」

男の顔を見ることもなく、シエルツは少女をうながして歩きだした。しかし少女はおろおろするばかりだ。

「じゃあな、おっさん。あのメシを毎日食わされてんのは同情するぜ。おい嬢ちゃん、おいてくぞ」

ザックに小突かれ、少女は慌てて傭兵たちの後を追いはじめた。いちどだけ、父親を振り返った。

男は、ほっとした顔で三人を見おくった。

ザックはいったん、ひとりで町へ戻ったが、先へ行くシエルツにすぐに追いついた。少女の足が、極端に遅いのだ。

それからいくらかも進まないうちに、その日の行程を切りあげた。

朽ちかけた民家跡を見つけ、そこで荷を置く。昼をまわるかまわらないかという時刻だった。

「明日の朝まで、ここで休む」

それを聞くやへタリと座りこんでしまった少女に、シエルツは自分の荷のなかから、パンを取りだして渡した。

「おまえの身支度を整えていこうと思う。そのまえに、少しお休み。眠っている間に、出発したりはしない」

少女はこくりとうなずくと、渡されたパンをかじりだした。

かじりかけのパンを抱えこんだまま眠ってしまった少女を横目に、ザックが口を開く。

「なあ、ホントのどこ、どうする気だ？　いつまでも連れ歩くわけにもいかねえしよ」

依頼されたとおりにフェランの修道院へ行くつもりがないことくらい、ザックにもわかっていた。しかし、かわいそうだからつれだした、などと感情的に行動するほど、シエルツは浅慮ではない。

「あの子を受け入れてくれるだろう場所がある。ある意味では、フェランも受け入れてくれる場所のひとつだ。あの子は、まだ世界を知らない。世界を見て……彼女自身が決